

【付帯資料、其の二】

声に出して読む万葉集 第四十八回

卷八 其の一

▼紀郎女の歌は、全部で十二首あり、相手の分かる歌は六首、内五首が家持に対する歌。卷四、七六二（三）と七七六の三首、家持の和ふる歌が七六四と七七七（八一）（五首）、それに卷八に一四六〇（一）（二首）

七六二

〔題詞〕 紀女郎贈大伴宿祢家持歌二首 「女郎名曰小鹿也」

〔原文〕 神左夫跡 不欲者不有八多也八多如是為而後一佐夫之家牟可聞

〔訓読〕 神さぶといなにはあらずはたやはたかくしてのち後に寂しけむかも

▽語釈

はた（ハタ）もしや一方で。 「はたやはた」 は「はた」の疊語形。

七六三

〔原文〕 玉緒乎 沢緒（あわを）二搓而 結有者 在手後（よ）一毛 不相在目八方

〔訓読〕 玉の緒を沢緒（あわを）に搓りて結べればありて後にも逢はざらめ（よ）やも

▽語釈

玉の緒（ハタハタ）玉を貫き通す緒。

沢緒（アワヲ）ほどけやすいようによつた緒。

あり（アリ）この世に生きている。

七六四

〔題詞〕 大伴宿祢家持和歌一首

〔原文〕 百年尔 老舌出而 与余牟友 吾者不厭 戀者益友

〔訓読〕
百年に老い舌出でてよよむとも我れはいとはじ恋ひは増すとも

▽語釈

よよみ＝体が曲がる。

▼大伴家持が久邇京から坂上大娘に贈る歌

天平十二年（七四〇）十二月十五日、聖武天皇は、左大臣橘諸兄の別業の地、久邇に至り、それを都と定めた。家持は内舎人としてこの行幸に供奉した。久邇京は天平十六年（七七四）、天皇が難波京に行幸するまで主都になつた。

卷四

七六五

〔題詞〕 久邇京に在りて寧樂の宅に留まれる坂上大娘を思ひて、大伴宿祢家持の作れる歌一首

〔原文〕 一隔山 重成物乎 月夜好見 門尔出立 妹可将待

〔訓読〕 一重山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ

七六七

〔題詞〕 大伴宿祢家持、更に大娘に贈る歌二首

〔原文〕 都路乎 遠哉妹之 比来者 得飼飯而雖宿 夢尔不所見来

〔訓読〕 都路を遠みか妹がこのころはうけひて寝れど夢に見え来ぬ

七六八

〔原文〕 今所知 久邇乃京尔 妹二不相 久成 行而早見奈

〔訓読〕 今知らす久遠の都に妹に逢はず久しく述べ行きて早見な

七七〇

〔題詞〕 大伴宿祢家持、久邇京より坂上大娘に贈る歌五首

〔原文〕 人眼多見 不相耳曾 情左倍 妹乎忘而 吾念莫國

〔訓読〕

人目多み逢はなくのみぞ心さへ妹を忘れて我が思はなくに

七七一

〔原文〕 偽毛 似付而曾為流 打布裳 真吾妹兒 吾尔戀目八

〔訓読〕

偽りも似つきてぞするうつしくもまこと我妹子我れに恋ひめや

▽語釈

うつしくもまこと＝本氣で眞實に。

七七二

〔原文〕 夢尔谷 将所見常吾者 保杼毛友 不相志思者 諸不所見へ有々武

〔訓読〕

夢にだに見えむと我れはほどけども相し思はねばうべ見えずあらむ

▽語釈

ほどけ＝下紐を解く。

七七三

〔原文〕 事不問 木尚味狹藍 諸弟等之 練乃村戸一所詐來

〔訓読〕

言とはぬ木すらあじさゐ諸弟らが練りのむらとにあざむかえけり

▽語釈

むらと＝腎臓の古名、転じて、心。

諸弟＝人の名（？）

七七四

〔原文〕 百千遍 戀跡云友 諸弟等之 練乃言羽者 吾波不信

〔訓読〕

百千たび恋ふと言ふとも諸弟らが練りのことばは我れは頼まじ